

兄弟子としての土井先生 (Prof. DOI, my respected senior and mentor)

玉井金五

2007年の新年を迎えて早々に土井先生の訃報に接することになった。私がお会いした時はいつもお元気そうであり、また精力的にお仕事をされていたので、まさかと思ったが、それが事実と知ったときは大きなショック受け、愕然としたことはいうまでもない。今となっては、ただひたすら土井先生のご冥福を心からお祈りするばかりである。

土井先生は、大阪市立大学経済学部、同大学院経済学研究科で学ばれた。学部から大学院のある時期までの指導教員はマルクス経済学研究の気鋭といわれた佐藤金三郎先生であり、大学院の中途から社会政策論の小川喜一先生の指導を仰ぐようになったと聞いている。私は、大学院に入学するとともに小川先生の指導を受けたが、その頃土井先生はすでに大阪経済大学に奉職されていた。しかし、社会政策を専門にするという点では同じ小川門下であり、私にとって土井先生は兄弟子ということになる。その土井先生と初めてお会いしたのは、たしか私が大学院に入学してからそれほど月日が経っていなかった時期であったと記憶している。土井先生は、私の大学院の研究室に立ち寄られ、社会政策に関する新しい本を刊行されたということで、1冊謹呈してくださった。それは、ご自身の社会政策の講義テキストとして書かれたものであり、私のような若輩にまで気を遣ってくださったことがことのほか嬉しかった。

当時、土井先生はイギリスの救貧法をはじめ歴史的なことを研究されていた。おそらくマルクスがいう原始的蓄積の歴史的過程における救貧行政のあり方に関心をもたれたのだろう。それは、まさに佐藤先生のマルクス研究と小川先生のイギリス社会政策史研究から学ばれた影響が大きかったと思われる。資本主義の生成とともに救貧問題は発生するが、その原点の確認作業は、土井先生の社会保障研究の礎石となっていく。その後、土井先生は一旦イギリス研究から遠ざかったようにも思えたが、1990年あたりではイギリスの社会保障の青写真といわれた『ベヴァリッジ報告』(1942年)に関する論稿を多く発表されている。先の救貧行政がイギリス社会政策史の出発点にあたるのであれば、『ベヴァリッジ報告』は救貧法の最終的解体を論じたということにおいて、いわば到達点である。その意味では、土井先生なりに一貫した研究手法を取られていたと思う。

土井先生は何年もまえから大学院で留学生を指導されていたが、そのとき『ベヴァリッジ報告』を徹底して教えたといわれている。社会保障のバイブルともいわれた同報告書の価値は現在においても何ら変わっていないと信じる土井先生は、どこにその真髓があるのかを院生に叩き込んでいったのであろう。実は、これが現在多大な成果につながっている

ように思われてならない。それはなぜかという、今から3年ほどまえに何と『ベヴァリッジ報告』の中国語版が刊行されたからである。いうまでもなく、改革開放政策以来、中国は大きく変貌した。そのなかでも特筆に値するのが、社会保障の建設である。現在、都市部を中心に社会保険をはじめとした制度化が段階的に図られている。とりわけ、この10年間の動きは目を見張るものがある。

いうまでもなく、中国では長年にわたって国有企業等をひとつの単位として、人々の生活保障を行ってきた。そうした時代において、人々が社会的危険に備えて事前に保険料を拠出するといった発想は必要なかったのである。いいかえれば、集団が責任をもって保障してくれるのであるから、個人レベルの特別な備えといったことはほとんど問題にならなかった。その中国において、保険料の拠出を伴う社会保険の導入がいかに大きなインパクトを与えたかはいうまでもないだろう。中国の社会保険で特徴的なのは、個人口座と社会的口座の2本立てを採っている点である。日本をはじめ、一般に主要国は社会的口座だけである。しかし、中国は2つの口座を設定した。このうち、個人口座はまさに個人の貯蓄にあたる。実は、この仕組みこそ先の『ベヴァリッジ報告』の精神を中国的に応用したのではないかと思われてならないのである。

周知のように『ベヴァリッジ報告』は社会的危険に遭遇したさいの所得保障のナショナルミニマム論を展開し、いわゆる最低生活の保障を訴えた。しかし、社会的な給付で事足りるというのではなく、それ以上の備えを個人の自発的努力によって行うことを奨励した。任意保険への加入などはその一例である。国家が関与するのは基礎的な部分で、それ以上は自助努力でということである。中国の社会保険をみると、個人口座という形で公的な制度のなかに自助努力的な部分が組み込まれているのがわかる。これは、見方によれば、『ベヴァリッジ報告』で述べられた原則の見事な応用であり、『ベヴァリッジ報告』を現在に生かす手法でもある。その意味で、土井先生が中国からの留学生に対して『ベヴァリッジ報告』の重要性を教え込んだのは、実に慧眼であったという他ない。『ベヴァリッジ報告』と中国社会保障が有機的に結びつけられた現実こそが、そのことを如実に物語っている。

一方、土井先生は家族の問題にも大きな関心を示し、これまで一貫して関連する論稿を発表されてきた。わが国でも核家族の成立以降一定の期間が経過したが、近年ではむしろ家族の変容、解体が叫ばれ、その行方が取沙汰されている。こうした状況に対して、土井先生はわが国における家族の機能、役割に再度注目し、これも見方によればかなり保守的ともいえる姿勢で、家族擁護を熱く説かれてきた。世帯単位から個人単位へという風潮のなかで、家族の性格も変質しなければならない面があるのはいうまでもないが、土井先生にすれば逆に決して失ってはならないものがあつた。おそらくそれは物質的なものではなくて、むしろ精神的な紐帯といったものであり、その比重が大きければそれだけ社会を安定させるということである。家族愛など今や死語に近くなったといわれるかもしれない。しかし、土井先生の家族論にはそうした価値観が強く意識されているように思われる。

土井先生は、学生、院生に大変な人気があつたと聞いている。それは、土井先生が醸し

出す独特の雰囲気第一の要因かもしれないが、むしろ根っこの部分には家族愛につながる学生愛といったものを十二分に有していたからであろう。研究者は研究のみならず、学生の教育にもかかわるわけであるから、学生からの高い評価は欠かせない。土井先生は、この点においても魅力的であった。しかし、そうした土井先生にとって、最大の悲しみはおそらく最愛の奥様を亡くされたときであったらと思う。私はその事実を後から知り、土井先生にお悔やみのお手紙を差し上げた。そのとき土井先生から実に丁寧なお返事をいただいたが、土井先生が奥様との生活をどれほど大切にされていたのが身に染みてわかった。土井先生にしては、珍しく長文のお手紙であり、無念の気持ちがそこにははっきりと現れていた。

そうした悲しみを乗り越えられた土井先生に最後にお会いしたのは、2003年のとき一橋大学で開催された社会政策学会のときであったと記憶している。1日目のある分科会で偶然ご一緒になり、中国からの留学生の報告に対して、土井先生も私もほぼ同一の質問をしたことを覚えている。東アジアで生まれつつある新しい社会保障が一体どのような理論、思想に拠って立つのかといったことに質問が集中したのは、決して偶然ではなかった。先にふれたように、すでにその頃から土井先生は留学生の指導に従事されていたし、私自身も研究の軸を東アジアの社会保障に移しつつあったからである。終了後、二人でお昼の食事をとったが、そのときは土井先生がほぼ一方的に最近の大学や学生指導等の話題などを提供され、その巧みな話術に私はただひたすら聞き惚れるしかなかった。

このように、土井先生とは初めてお会いしてからお亡くなりになるまで、素晴らしい思い出として残る形での交流ができたことは私にとって大変幸せであった。同門の兄弟子として、土井先生の振る舞いこそは私にとって何物にも変えがたいものがある。土井先生の生き方、考え方は、多くの人々の心に訴えるものがあり、それは今後とも研究、教育面をはじめとして着実に引き継がれていくであろう。